OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

チェーホフの文体に就いて

——二項文を中心に——

山　田　　勇

目　　次

はじめに
Ⅰ　ヴェ．ヴィノグラードヴァによる作家の推敲タイプの分析
Ⅱ　二項文と現実分節
Ⅲ　統辞論的分析
Ⅳ　語彙論的分析
おわりに

は じ め に

一人の作家の文体を調べる為には，彼の創作活動の様態を悉く研究の俎上に載せ，多方面から詳かにする必要がある。本稿では，アー．ペー．チェーホフの作品[1]にみられる文体上の特徴を，二項文を中心に考察し，今後のチェーホフ論の一助とすることを目標とする。

さて，上述の如く，作家の作品を通してその文体の特色を記述する作業は，大別すれば，1）作家の有する人生観と 2）その顕現体とでもいうべき作品群の双方からの分析と論証が前題とされる。1)の問題に関する研究活動は幾多の文学研究者の手で出生から他界に至る迄の凡る過程と個々の作品の出会いが丹念に照合され，それらの相互関係が論ぜられて来た。チェーホフに就いてもこれらの事情は然りであろう。彼は，世の作家の常として，自分と関りを有する同業の士，編集者，演劇関係者，知人達に沢山の書翰を認めており，又円熟期にあった創作上のプランの輪郭は，所謂，『手帳』に，時に触れ，折に触れ，彼の遺した書翰とは対蹠的ともいうべき簡潔さをもって記されている。日記も同じ文体で残されている。これらの基礎資料を調べてみると，一部には明らかに作家により作品の中に直接採られている行もあるが，大部分は作品の為の地

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

塗りであり，創作の為の方向付けであるといって良い。チェーホフが創作の際に心掛けたことは『手帳』や日記にも見られる様に簡潔さ（простота）であった。そのことと関連して，ヴェ．エヌ．ヴィノグラードヴァは論文「アー．ペー．チェーホフの文体の展開」に於いて，1899-1901年にかけて出版された10巻本選集を準備する過程で，作家チェーホフが既にいろいろな形で発表済みの初稿版を推敲した部分に就き検討した結果，チェーホフの表現には，更に，誠実さ（искренность），慎重さ（сдержанность），緻密さ（компактность），均斉（пластичность），表現の活写性（выразительность），優雅さ（изящность），音楽性（музыкальность）が認められると発表している[2)]。

これらの分析結果に共通しているチェーホフの文章作法上のテーゼ，простотаは決して彼の思弁的な理念にのみ立脚するものではなく，抑も，作家としてのスタートを切るに至った動機に求められることは斯界研究者の夙に指摘するところである。詳細は先達の論叢に委ねることとし，本論の主題に立ち返り斯様な作家のテーゼが作家の理念の顕体たる作品の中で如何様に実現され，生かされているか，後者のテクスト研究から考察を始めよう。

I

分明なこととして作品は作家の魂の決定的な発現であるからテクスト自体の研究は，上述の，最初に挙げたテーマの検討に劣らず重要であり，それ故作品を最終的に世に問う迄の主題の枠組みから日の目を見た作品に対する周到な推敲に至る迄の彼の精進は並大抵のものではない。ヴェ．エヌ．ヴィノグラードヴァはチェーホフの場合を跡付けその文体の傾向を記述する目的で，統辞論的，語彙論的側面から作品を考察した。その結果，特にアー．エフ．マルクス社版への推敲の段階での彼の変更方針を克明に指摘している[3)]。以下にその摘要を示す。

1．省略（сокращение）

「物を書くということは一に無味な表現を消去する力量に掛っている。」[4)]

（Обыкновенно）А за ужином（после рюмки）（он становился

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

угрюм и поднимал гражданские вопросы, на этот же раз, он, выпив водки, уже не трогал этих вопросов, а) много ел (, каламбурил) и говорил (об огурцах) глупости. Он уверял, что когда зимою (или осенью) ешь свежие огурцы, то во рту пахнет весной.

«Рассказ госпожи NN»

夕食後（はいつもそうなのだが）（グラスを向うに）彼は（不機嫌になって市井の悶着にかかろうとしたが，そういう時にウォッカを一杯やるものだから，もうその問題に気が向かず，それで）腹ごしらえをうんとして（駄酒落をとばしたり）胡瓜にまつわる戯言を言うのだった。彼は冬（か秋）に新鮮な胡瓜を食べれば口中に春の薫りがただようと堅く信じていた。

（N 嬢の物語）

これは推敲全体の過半数を占める。

2．物語からの数詞や，人物，物品をいたずらに装飾する語句の削除

「私が物を書く場合，読者をあてにする気持が大であるといえます。私は読者が物語に顕れない主観的な要素をいくつも自分なりに付け加えてくれるものと思っているのです。」[5)]　（スヴォーリンへの手紙）

Коллежский асессор Мичуев остановился около телеграфного столба (с цифрой 36) и глубоко вздохнул.　«Там же»

八等官ミチューエフは（36という数字のみえる）電柱の所で止まると大きく息をついた。　（同上）

В ней лежат (13 переводных картинок) переводные картинки.

«Там же»

その中には（13枚の）移し絵が置いてあった。　（同上）

Бедное лицо его трепетало от вдохновенья и счастья.

彼の青白い顔が気持ちの昂りと幸せで震えていた。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Лицо было бледно. «Там же»

顔が蒼白であった。 (同 上)

3. 自然描写の同様な簡潔さへの配慮

「会話の中断となる自然描写に配慮が感じられません。そういう描写を読んだ人は，この様に二・三行で更にコンパクトにならないものかと思うのです。」[6] (ゴーリキーへの手紙)

Все почувствовали, что в воздухе пахнет молодой листвой тополя, розами, сиренью. (Каждого невольно потянуло к окну, чтобы взглянуть на тихую безлунную ночь и послушать ласковый шепот деревьев. Вальс и весна искренни.)
«Шампанское (Рассаз проходимца)»

皆は大気がポプラの若葉やバラ，ライラックの香りに包まれていると感じた。(皆は闇夜を窺い樹木の心地良い囁きに耳を傾けようと我知らず窓辺へ心が向かうのであった。) (シャンパン，山師の物語)

チェーホフは上例に見られる擬人化にも陳腐なものを感じ，「自然描写の美しさと表現力は≪太陽が沈んだ≫(Зашло солнце.)，≪暗くなった≫(Стало темно.)，≪雨が降った≫(Пошел дождь.) のような簡潔で明快な語句にも感ぜられます」(ゴーリキーへの手紙) と述べている[7]。情景描写には更に出来る限り名詞と動詞の定語を外すようにと主張している[8]。

(Туча приближалась к нам, а мы к ней. На ее суровом фоне отчетливо белели наш дом и церковь, серебрились тополи, а в окнах и в кусочке пруда, который выглядывал из-за деревни, отражалось и переливало огнем заходившее солнце. В воздухе пахло грозой и скошенным сеном.)

(暗雲が我々の方に近ずいて来た。我々もそちらへ寄って行った。その荒涼たる様を背後にくっきり白く輝いているのが我々の家と教会で，ポプラは銀色に光っていた。そして窓や木陰から見え隠れする池の一隅に沈みゆく太陽が映

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

え，炎の様に見えた。大気は夕立を思わせ，刈り取られた干草の臭いで充満していた。)

На ее фоне белели наш дом и церковь, серебрились, высокие тополи. Пахло дождем и скошенным сеном.

«Рассказ госпожи NN»

それを背景に我々の家と教会が白く輝き，背の高いポプラの木が銀色に映えていた。今にも雨になりそうで，干草の草いきれが立ちこめていた。

(N 嬢の物語)

4. 外来語の排除

「小生が貴下に一筆致しましたのは外来語や外来語々源のロシア語とか，殆ど用いられることのない言葉は不作法であるという意味でなく，不便だということをお伝えしたかった為です。」[9]

То он воображал себя в гостиной у Раббека (на tete-a-tet'ke,) рядом с девушкой. «Поцелуй»

チェーホフが外来語や外来語源の単語を用いなかった理由の一つは，それらの語彙がロシア語の文中に用いられると，彼の意図しない皮肉とか否定的ニュアンスを読者に印象づけてしまうと考えてのことと思われる。

Тут, направо, обитал его жилец, слесарь Егорыч—степенный, но пьющий (субъект) человек. «Старый дом»

その右側に住んでいたのが彼の間借人の錠前屋エゴールィチである。彼は真面目ではあるが，酒の好きな（輩）人であった。 (陋　屋)

文中の субъект はラテン語の subjektum が語源であるので[10] 転義ということになり削除されるところとなった。

5. 高踏で衒学的な語彙や公式文書にみられるような語彙の排除

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

「小生がゴーゴリやトルストイ風に考えることが出来るのであればなおさらのこと，正しい表現に由って民衆の気持ちが表わせないということはありえません。」 (ゴスラーフスキーへの手紙)[11]

「吟味された言葉を大切になさい。言葉は簡単でしかも整っていなければなりません。例えば従僕であれば，今風に話すのではなく，要領良く話すものなのです。」 (兄へ宛てた手紙で)[12]

...отказывает (мне судьба) нам жизнь. «Рассказ госпожи NN»

(運命が私に逆らう) 私達は生きて行けなくなる。 (N 嬢の物語)

...Он увидел (следующее) такую картину. «Добрый немец»

彼は (次の様な) そういう絵を見た。 (気立ての良いドイツ人)

Это Смирнов. Это Груздев, — (бормотал) говорил директор. Такой проклятущий мороз, что хуже собаки всякой! — продолжал он (тараторить) говорить. «Мороз»

「これはスミルノーフ…とグルージェフ。」支配人は (口ごもった。) 言った。「何だっていうひどい寒さだ。」彼は (多言を弄じていた。) 話し続けた。 (厳寒)

作家が「つぶやく」(бормотать) とか「良くしゃべる」(тараторить) を用いず中立的な「話す」(говорить, сказать) を専ら用いたのは，一方で表現の明快さを求める気持ちと，他方で文芸作品に紋切り形な手法を用いることを避ける気持ちが働いた為に外ならない。

—Как?!— (гаркнул) крикнул генерал, бледнея. «Тайна»

「ええ?!」と将軍は (声高に) 叫んで，蒼白になった。 (秘 密)

(От пива так его развезло, что, когда извозчик вез его с вокзала на Пресню, он клевал носом и бормотал...)

(彼はビールに飲まれてしまい，馭者が彼を駅からプレースニャに運んだ時

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

には，居眠りしながら，もぐもぐ呟いていた。)

> От пива он стал очень добрым, так что, когда извозчик вез его с вокзала на Пресню, он все время бормотал... Теперь мне мороз нипочем. «Мороз»

ビールを飲んだので彼は大変気がゆるみ，馭者が彼を駅からプレースニャに運んで来る間中ずっともぐもぐ呟いていた。「さあ，冬将軍(マロース)なんか，なんでもないさ。」 (厳寒(マロース))

6．副動詞表現の単文化，従属構造の並立構造化，間接話法化，状況語（前置詞＋名詞構文）の副詞化，有前置詞構造化，同種要素間中の接続詞の削除。

「句を整え，それをより表情溢れる濃密なものとしなさい。紙上に記入するまでに，各句を頭の中で二日程寝かし力を与えないといけません。真の文豪の手稿は，須く，縦横無尽に消去され，いたるところ汚れ，書き込みや作者一流の削除，汚痕に満ちているものなのです。」[13)]

(アー．エス．グルジーンスキーへの手紙)

> (Когда она пришла к нему в седьмой раз, он, окончательно уже решивший не тратить попусту времени и денег, отказать ей и пригласить другого учителя, достал из кармана конверт с семью рублями, и держа его в руках, начал конфузливо...)

(彼女が七度目に彼の許へ来た時，彼は既に，時間と金を無駄にしないよう，彼女を断って，他の先生を招くことに最終的に決めたので，ポケットから七ルーブル入った封筒を取り出すと，それを両手に，もじもじ始めた。)

> И он решил не тратить попусту времени, расстаться с ней и пригласить другого учителя. Когда она пришла в седьмой раз, он достал из кармана конверт с семью рублями и, держа его в руках, очень сконфузился и начал так... «Дорогие уроки»

彼は時間を浪費したくなかったので，彼女と別れて他の先生を招くことにした。彼はポケットから七ルーブル入った封筒を取り出しそれを両手に握ると真

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

赤になってまごつき始めた。 (高価な教訓)

(Когда я,) ложась спать (, не спеша), я зажгла свечу и отворила настежь свое окно, (и) неопределенное чувство овладело моей душой. «Рассказ госпожи NN»

(私が) 横になって (横になった時), 私はローソクに火を点し窓を開け放した。(そして) 得体の知れない感情が私の心を捉えた。 (N 嬢の物語)

(Если им дать, то они еще попросят, а отказать нельзя, потому что будут клясть, сплетничать, желать всяких напастей.)

(もし彼らのいいなりになるなら, 更に彼らは要求するだろう。だが拒絶する訳にもいかないのだ。そうしなければ彼らは根に持って他人に告げ口するだろうし, 凡る不幸におとし入れようとするのだから。)

Если им дать, то они еще попросят, отказать — будут... клясть, сплетничать, желать всяких напастей. «Выигрышный билет»

もし彼らのいいなりになるなら, 彼らは更に要求するだろう。断ることにでもなれば, 多分, 恨み, 人に言いふらし, 執念深く人の不幸を願うだろう。 (富籤)

(У входа в) Около конюшни не было ни души.
«Рассказ госдожи NN»

厩(の入口のところ)の近くには人一人としていなかった。(N 嬢の物語)

Приняв позу скучающего слушателя, он чуть заметно зевнет, потянет к себе какую-нибудь газету (и), начнет читать...
«Интриги»

退屈している聞き手だというポーズをとって彼は僅かにあくびをして, 自分の方に何かの新聞を引き寄せ, (そして) 読み始めた。 (はかりごと)

И потом Воротов не спал всю ночь, мучился от стыда, бранил себя (и), напряженно думал. «Дорогие уроки»

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

その後，ヴォーロトフは一晩中眠らず恥しさに苦しみながら自分を罵り，（そして）ひどく考え込んでいた。（高価な教訓）

7．テクスト中の語順変更

(Супруги стали смеяться и долго молча глядели друг на друга)

（夫婦は笑い始めた。そして，長いこと黙ったまま連れ立って散歩していた。）

долго глядели друг на друга молча. «Выигрышный билет»

長いこと歩き回ったが二人ともその間黙っていた。（富籤）

(...Ему казалось, что не он идет, а вместо него кто-то другой, посторонний)

（彼は彼でない人が歩いている，彼の代わりに誰か他の人，無関係の人〔が歩いているよう〕に思えた。）

...что идет не он... «Тиф»

…歩いているのは彼ではない… （チフス）

Он выходил только для того, чтобы сунуть (какую-нибудь железку в печку)

彼は（鈍なカンナを暖炉に）投げ入れる為に，出て行っただけである。

...В печку какую-нибудь железку «Старый дом»

…暖炉に鈍なカンナを… （陋　屋）

以上がヴェ．エヌ．ヴィノグラードヴァの挙げたチェーホフの文体上の特徴の概略である。瞥見したところ，以上の概ね七種の特徴と，先に示された文体の特質をなす簡潔さ（простота）との有機的な関係に就いての説明に若干の不

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

満を覚える。ともあれ，これらの特色は文法的側面から大別すると次の二つのグループに分けられよう。

〔1〕 語彙論的範疇に関るもの

〔1〕に属するのは，2)，4)，5) に指摘された種類のもので，何れも語彙の選択に係るテーマである。この中には，語と語の共起関係に関するカテゴリー，例えば，名詞 картина に対して，形容詞 следующая か指示代名詞 такая の何れを立てるかとか，動詞 отказывать の主語と補語として，同一の組合せ кому-что に対する対応語彙 (мне судьба か нам жизнь か) の選択は孰れが良いかという問題等が含まれている。従ってこれらの語彙の意味構造の基礎的研究が前提となろう。更にこの範疇の考究は意味論的同義性 (семантическая синонимия)[14] とも関るので，それ故〔2〕の研究が不可欠といえよう。

〔2〕 統辞論的範疇に関るもの

〔2〕に属するのは，1)，3)，6)，7) の各分野である。統辞論上の各構成要素間での部分的な変更が文に与える影響に就いては言を俟つまでもない。筆者は先にチェーホフの自然描写に対する配慮に関して，特に一項文を中心に考察したが[15]，物語のプロットの流れを遮るこれらの表現に際し，作家が多くの無駄な言葉に代えて，Темно. を始めとする無人称文や Шел крупный пушистый снег. 等の準一項文[16] で応じている理由も простота を創作の基本理念と心得る作家にしてある程度頷けるのである。

II

デー．エー．ロゼンターリ，エム．アー．チェレンコーワに依ると，二項文とは「主語と述語をその基本構造とする文で，この場合，主語と述語はそれぞれの構成素中に一種乃至数種の説明語を有する場合もあると定義している[17]。二項文をどの様に定義するのかに関しては大いに議論の分れるところであって，最近ソヴィエトとチェコスロヴァキアで相次いで上梓された現代ロシア標準語文典の統辞論篇を並読し，この術語の定義を比較してみると，先のロゼンターリその他が付記している定義部分が，双方の文典で微妙に相違している。これら2冊の業績にも見られる如く，文要素を分析する際に，主語，述語，補語と

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いった従来の術語に替えて N_n, Vf, N_x と具体的に夫々の語の機能を示す方法が広く行なわれているが，その様式に従うなら，チェコスロヴァキア版では二項文はその構造が基本的に N_n-Vf-N_x と図式化されるのに対し，ソヴィエト版では N_n-Vf が基本形であるとする見解を取っている。前者の分類に従えば動詞述語を有する二項文は次の様に図式化される[18]。

N_n-Vf-N_x: Охотник убил медведя.

$N_n-Vf-Adb$: Книга лежит на столе.

$N_n-Vf-N_x-N_x$: Бабушка рассказывает детям сказку.

N_n-Vf-N_x-Adb: Я поставил чемодан на пол.

$N_n-Vf-Adb-Adb$: Девочка перепрыгивает с камня на камень.

更に名詞述語の場合，

$N_n-Vf_{cop}-A-N_x$: Он не был способен на такой поступок.

と図示される。以上がチェコ版であるが，一方ソヴィエト版では，元来二項文 (двусоставные предложения) という術語は用いておらず，二要素式 (двукомпонентные схемы) と一要素式 (однокомпонентные схемы) に分類されている。そして二要素式に否定生格構文が含められていて単文が必らずしも従来の単項文，二項文といった概念としては捉えられていない。図式だけを示せば次の如くである[19]。 1) N_1-Vf, 2) Vf_{3s} Inf, 3) N_2 (neg) Vf_{3s}, 4) N_1-N_1, 5) $N_1-Adj_{1\ полн.ф.}$, 6) $N_1-Adj_{1\ кратк.ф.}$, 7) $N_1-Part_{1\ кратк.ф.}$, 8) N_1-N_2 又は Adv, 9) N_1-Inf, 10) N_1-Adv_{-0}, 11) $Inf-N_1$, 12) Inf cop Inf, 13) $Inf-Adv_{-0}$, 14) Praed Inf, 15) Praed (neg) N_2/N_4, 16) $Praed_{part}$ N_2, 17) Adv_{quant} ($N_{1\ quant}$) N_2, 18) *Нет* N_2, 19) *Ни* N_2, 20) *Никого* (*ничего*), 21) *Никакого* (*ни одного, ни единого, ни малейшего*) N_2, 22) Neg Pron Inf

さて，斯様に複雑な二項文の種類分類の作業を通して我々が文体の分析の為に注目しなければならない若干の特徴を調べてみよう。その第一の問題は，二項文中には文法上の主辞と賓辞が具備されていることである。而も，それぞれの成分が更に数種の下位カテゴリー化される要素から成り立つ可能性も恒常的

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に存在するので，その語順の移動が生み出す文の叙想的ニュアンスが作家の創作活動に与える影響の大きいロシア語にあって，この問題の意味するところは非常に緊要である。例えば，次の様な中立的語順を有する二項文

(1) Эта проблема заинтересовала ученых.

（この問題が学者達の関心を集めた。）

という文を統辞論的に記述すれば，先ず個々の文要素の次の様な語彙論的，意味論的基礎 (B^x)

B^x: 〈ЭТА ПРОБЛЕМА/Subj+ЗАИНТЕРЕСОВАТЬ/Praed
+УЧЕНЫЕ/Obj〉

からなる (1) 文の深層構造 Σ に，指標 1) 過去時制 (Praet), 2) 直接法 (int), 3) 平叙文意伝達 (decl) 4) 肯定 (affirm), 5) 能動性 (act), 6) 一般情報的現実分節 (gnrl-inf) の諸要素が加えられ深層構造 Σ^x が得られる。そしてその実現化がはかられて必要核文 nS^x, つまり (1) 文が得られることになる。次に (1) 文から派生した (2) 文の場合はどうであろうか。

(2) Ученые заинтересовались этой проблемой.

（学者達はこの問題に興味をひかれた。）

(2) 文は，(1) 文の B^x に於いて，その Σ に 5) 能動性の指標に替え，反転受動性の指標 revers を加えた結果得られたものである。(2) から明らかな様に，(1) 文に於ける主語の造格補語化が行なわれ，述語は再帰動詞化がはかられる。以上の様な手順は次の変形規則で書き込まれる。

(3) $N^1_n + V_{act} + N^2_a = N^2_n + V_{refl} + N^1_q$

(3) 式では具体的に示されてはいないが，(1) 文及び (2) 文を比較すれば，語順の入れ替えが齎す統辞論的，意味論的ニュアンスの差が，如何に大であるかが理解できる。さて，今，(1) から (2) へ移るのに，(3) という規則を用いたが，こうした手続きを経ずに受動変形が行なわれるケースがある。それは，

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

B^x でやはり Σ に受動の指標 pass を加えて次の文を生み出す方法である。

(4) Ученых заинтересовала эта проблема.

(あの学者達ですって，この問題が気になるのは。)

文中に↑を付された語 ученых は文のイントネーション核であることを意味し，それと補語的要素の文頭への配置によって状態受動を表わそうとする試みである。これは語順と，文意を示差的に示すイントネーションとの組み合わせが醸し出す独特なニュアンスを文に埋め込む意図をも有しており，それ故，語順の変更が作品の推敲の有力な手段となりうるのであろう。ペー．アダメッツはこれらの組み合わせを文の線状アクセント機構 (ЛАО) と呼び，ЛАО は文体論的ニュアンス，又は表現力と情緒性のレベルの点で，次例の様に，文相互に差を与えると述べている[20]。

а. Мы живем в Москве.

(我々が住んでいるのはモスクワです。)

б. Мы в Москве живем.

(我々はモスクワに住んでいます。モスクワに。)

в. В Москве мы живем.

(モスクワですよ。我々が住んでいるのは。)

III

前章で語順の変更が生ずる文体上の効果に就いて方法論的考察を加えておいた。本章では，その語順の変化が文法的に明確な変換を生ずる相カテゴリーを例に攻究をすすめる。

文が能動相をとるか，受動相をとるかの表現上の差は，賓辞部の中心を成す動詞動作と，或る行為が成就する為の成立要件たる主体及びその客体間に生み出される行為の流れの方向性の差として捉えられる。主体からの行為の流れを主体中心に考える時，流れが客体に対して遠心的であれば能動相として表現されるのであり，求心的であれば，その行為の結果が自己に還流して古典語にみ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

られる様な中動相を形成することになる。これを能動相と受動相の対照として考える時，表現の主題を主体の側から記述するのか，客体の側から記述するのかという視点の問題となろう。ロシア語では，こういう相の表現方法として，大別すれば前述の様に，1）統辞構造の変更と，2）文の現実分節 が考えられる。因みにチェーホフが相の表現を作品中で用いる場合，前者の方法は少なく，2)によることが顕著である。

さて，文体を整える手段として考えられる具体的な方法は，修辞的な 1) 叙想的改変以外に，2）文法変形，3）文の現実分節による方法の孰れかであろう。これらの内，2)，3）が相のカテゴリーと関係するが，2) には更にいくつかの種類が認められる[21)]。

a. 受動変形 Σ の act を pass に改める。

Наш коллекив разработал проект → Нашим коллективом был разработан проект.

(我々のグループがこのプロジェクトを完成した。→ 我々によって完成されたのは，このプロジェクトである。)

б. 半受動変形 Σ の act を demipass に改める。

Я вспомнил интересную историю → Мне вспомнилась интересная история.

(私はこの興味ある出来事が心に残った。→ 私の脳裏に焼き付いたのは，この面白い出来事であった。)

в. 反転能動変形 Σ の act を revers に改める。

Ученьх заинтересовала эта проблема → Ученые заинтересовались этой проблемой.

(学者達の注目を集めたのはこの問題である。→ 学者達はこの問題に興味を引き付けられた。)

г. 半能動変形 Σ の act を demiact に改める。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Буря вырвала молодую березу → Бурей вырвало молодую березу.

(嵐が白樺の若樹をなぎ倒した。→ 嵐で白樺の若樹が倒れた。)

これらの受動変形のうち，в は文の現実分節と重なる部分があり，г は一項文のスタイルをとる変形である。先ず а についてみると，このカテゴリーは次の二例に示されるごとく，二種の下位範疇に分かれる。変形規則は次の通りである。

(5) $N^1_n + V_{act} + N^2_a \rightarrow N^1_i + V_{pass} + N^2_n$

(6) ...а Хавронья Ивановна жила где-то на дворе в сарайчике и появлялась только во время ученья. Хозяин просыпался поздно и, напившись чаю, тотчас же принимался за свои фокусы. *Каждый день в комнатку вносились П, бич, обручи,* и каждый день проделывалось почти одно и то же. «Каштанка»

(毎日部屋に持込まれたのは，П〔という形をした木枠〕や鞭，輪であった。)

(7) Немного погодя опять вошел незнакомец и принес с собой какую-то странную вещь, похожую на ворота и на букву П. На перекадине этого деревянного, грубо сколоченного П висел колокол и *был привязан пистолет*: «Там же»

(ピストルが結び付けられていた。)

(6) 文（イタリック部分，以下同じ）の Σ における語彙，意味論的基礎 B^x は

B^x: ⟨(ХОЗЯИН/Sudj) + В КОМНАТУ/Adb Compl + ВНОСИТЬ/Praed + П, БИЧ, ОБРУЧИ/Obj⟩

であり，これに就いて，act を pass に変更して得られた結果が (6) 文である。一方 (7) 文は，同様にして，B^Y は

B^Y: ⟨(ХОЗЯИН/Subj + ПРИВЯЗАТЬ/Praed + ПИСТОЛЕТ/Obj⟩

である。(6) 文と (7) 文の文意差は B^x 及び B^Y にみられる動詞の体の差として現われる。つまり (6) の様な再帰構文では，動詞の名指す行為が受動化されるのに対し，(7) の文詞形ではその行為が状態化されている。これは，蓋し，

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(6) 文の動詞 ВНОСИТЬ が不完了体であり，(7)文は ПРИВЯЗАТЬ と完了体を用いていることに由る。

チェーホフがこのタイプの文を受動表現に多用しない理由は，これが，唯，当事者間の外界に対する視点の置き方の相違にのみ重点を置く表現であり，何より形式的な常套句を避ける彼の姿勢と符合する様に思われる。前引の в の受動表現には形式的な制約が存在せず，多少曖昧性の強いニュアンスが認められるので，作家は受動表現を作る際には，文のイントネーションと語順から成る現実分節の手法を随所に用いたものと思われる。

(8) —Иван Иваныч! Что же это такое? Умираешь ты, что ли? Ах, я теперь вспомнил, вспомнил! — вскрикнул он и схватил себя эа голову. — Я знаю, отчего это! Это оттого, что сегодня *на тебя наступила лошадь*! Боже мой, боже мой! «Там же»

(お前は馬に踏んづけられた。)

(8) 文は，(6)，(7) 文とは異なり直訳すれば「馬がお前を踏みつけた」という直接法の文である。現実分節のタイプも数種認められるが，文に含まれるトピックの主題とそれに対する説明の内容により (8) 文を線状アクセント機構に沿って配列すれば，現実分節は，

(8) на тебя лошадь наступила/лошадь на тебя наступила/лошадь наступила на тебя

と多様に表現することが可能である。しかし，チェーホフが選んだ語順

…на тебя наступила лошадь!…

には受動性が看取される所以のものが存する。文の現実分節に当って，一般的な情報伝達の為に主題とその説明は，この順に顕れるという前提があるからである。引用例でもこのテーゼは生きており，文脈によればこの文は，明らかにイワン・イワーヌィチが主題なのである。エス.イー.ココーリナはこのことに関連し次の様に述べている。「意味上の主体を資辞で表わされた特徴（行為内容のこと—筆者）であると理解すれば…ロシア語の意味上の主語は任意の名詞

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

斜格で表現され得るという結論を得ることになる。」[22)]

«Но **людей** замучил голод.»

(人々は飢餓に苦しめられた。)

(8) 文と同様な例を次に挙げておく。

(9) Глаза его, как всегда, глядели серьезно и ласково, но лицо, в особенности рот и зубы, были изуродованы широкой неподвижной улыбкой. Сам он хохотал, прыгал, подергивал плечами и делал вид, что ему очень весело в присутствии тысячей лиц. Тетка поверила его веселости, вдруг почувствовала всем своим телом, что *на нее смотрят эти тысячи лиц*, подняла вверх свою лисью морду и радостно завыла. «Каштанка»

(カシタンカが何千という人々から見られている。)

(10) — Однако *плохо же кормят тебя твои хозяева*! — говорил незнакомец, глядя, с какою свирепою жадностью она глотала неразжеванные куски. — И какая ты тощая! Кожа да кости... «Там же»

(お前は主人からろくな食べ物を食わせてもらえなかった。)

(11) Каштанка помнила, что по дороге она вела себя крайне неприлично. От радости, что *ее взяли гулять*, она прыгала, бросалась с лаем на вагоны, конножелезки, забегала во дворы и гонялась за собаками. «Там же»

(カシタンカは散歩に連れ出された。)

(11) 文は不定人称文であるが, 文脈からの主格 主語の省略は 受動表現に近い効果を生むと考えられる[23)]。

IV

二項文の文体論的観点から注意を要する第二の点は各要素の語彙論的側面である。例えば,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(12) Тоска сжала сердце.

(憂いが胸をしめつけた。)

という文は，一般的に解釈すれば胸をしめつけられる主体が自分を含めた存在であることは明瞭であり，従って (12) は，例えば，次の様に書き換えが可能であろう。

(12′) Тоска сжала меня.

(悲しみに打ち拉れた。)

前述された語順と文のイントネーションを考慮すれば，(12′) 文は次の様に変形することも可能である。まず (12′) 文の (B^x) は

B^x: 〈ТОСКА/Subj+СЖАТЬ/Praed+Я/Obj〉

であるからこの Σ に指標 Praet, ind, decl, affirm, revers, gnrl-ver を加えると

(12″) Меня сжала тоска.

が得られる。(12″) 文の文体的な性質は伝達意図が明らかに一個人の心理的状態にあるにも拘ず，文の拡張子が меня の形をとっている点にある。又その主人公が感ずる内容自体が描象名詞 тоска で表現される。この文の中立的表現は (B^Y) が

B^Y: 〈Я/Subj+ТОСКОВАТЬ/Praed〉

である場合で，これにより以下の (12‴) の核文が作られよう。

(12‴) Я тосковал (по кому-чему).

(私はある事，ある人物に憂いを感ずる。)

チェーホフの作品にはこうした (12″) と (12‴) の様なニュアンスの差の認められる文が多く見られる。例えば，

(13) Каштанкою овладели отчаяние и ужас. «Каштанка»

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（カシタンカは落胆し嫌気がさした。）

が挙げられる。(13) 文の (B^x) は次の通りである。

B^x: 〈КАШТАНКА/Obj+ОВЛАДЕТЬ/Praed+ОТЧАЯНИЕ И УЖАС/Subj〉

(13) 文の中立的表現は，同様に，(B^x) 中の語彙項目を一部名詞から動詞化することによって，次の核文 nS^Y として表わすことができる。

B^Y: 〈КАШТАНКА/Subj+ОТЧАЯТЬ И УЖАСНУТЬ/Praed〉

(13′): Каштанка отчаяла и ужаснула.

(13) 文と (13′) 文の文体上の差は (B^x) と (B^Y) に原因が存すると考えられる。(13) 文には補語である筈のカシタンカが，恰も意味上の主語の役割をし，文法上の主語である〔落胆〕と〔嫌気〕(отчаяние と ужас) は動詞述語の構成要素の一部にすぎない。チェーホフは更に (13) 文の中立的語順たる

(13″) Отчаяние и ужас овладели Каштанкою.

をとらずに，文の現実分節の効果を語順の置換によって表わそうとしているのである[24]。(13) 文にも明示されている様に，チェーホフは，作品の文体を整える際に上述された様な二項文の特色を正しく踏まえながら語順の配置と状態受動を意味する場合の語彙の選択をうまく混和していることが看取される。以下に同種の文例を示そう。

(14) Обыкновенно вечерами хозяин уезжал куда-то и увозил с собою гуся и кота. Оставшись одна, Тетка ложилась на матрасик и начинала грустить... *Грусть подкрадывалась к ней как-то незаметно и овладевала ею постепенно, как потемки комнатой.* «Каштанка»

（悲しみがどういうものかいいようもなくカシタンカに忍び寄り，夕闇が部屋を包む様に徐々に彼女は悲愁に包まれて行った。）

(15) Затем он потушил лампу и вышел. Каштанка разлеглась

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

на матрасике и закрыла глаза; с улицы послышался лай, и она хотела ответить на него, но *вдруг неожиданно ею овладела грусть.* «Там же»

(突然彼女は悲しくなって来た。)

(16) У Тетки запестрило в глазах и в душе. От белолицей мешковатой фигуры пахло хозяином, голос у нее был тоже знакомый, хозяйский, но бывали минуты, *когда Тетку мучили сомнения,* и тогда она готова была бежать от пестрой фигуры и лаять. «Там же»

(おばさんが疑念に苛まれた時に)

(17) Начиналось с того, что у собаки пропадала всякая охота лаять, есть, бекать по комнатам и даже глядеть, затем *в воображении ее появлялись какие-то две неясные фигуры, не то собаки, не то люди, с физиономиями симпатичными, милыми, но непонятными;* «Там же»

(カシタンカの想像裏に，犬でもなく，人間でもない，好感の持てる表情をした，優しくもあるけれど雲を摑む様なはっきりしないものが現れた。)

引用された文のパターンは N_n+V+N_x を主体とする。これらの文に共通する特徴は，N_n に人間の心理状態に関る抽象名詞が立ち，N_x にそれを自覚する主体が置かれる点にある。先に分析の通り，これらの表現は，N_x に立つべき主体が，主格形をとる形で表現出来るのである。人間の心理的，情緒的表現は叙想的性格を帯びることが多く，それ故，作家の好むと好まざるとに拘ず，作品に多用される傾向が強くなる。従ってこうした人間の感覚に訴えるいろいろな出来事，動機を知覚し，感覚として表出すべき主体を主格に置くか，斜格に立てるかは文意に微妙な影響を与えることになる。ここにいう文の場合，主格に立つ抽象名詞は，文の現実分節の観点から眺める時，述語の一部をなし，文の主題（この場合，心理的影響を受ける主体）を説明する為に機能とすると主張する研究者も多い[25]。チェーホフがこのタイプの文を多用した理由はやはり人間の心理的，情緒的表現を動詞によってではなく，名詞により為すことで

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

表現に緩急の弾みをつけることが，彼の主張する простота に繋るからに外ならない。名詞表現が動詞表現に比べて優る点は文に張りとリズムを与える事にあるからである。

おわりに

本稿では，チェーホフの二項文の特徴が分析された。その糸口は彼が作品を完成させる過程で行なった文の推敲の幾らかのタイプに依るところが大きい。彼は文体を整えるに当り，語彙論的側面と共に，統辞構造にも意を用いた。前者としては修辞上の手直しが主なものであったが，後者に就いては語順による相の表現や抽象名詞と語順による認識主体の心理的表現を多く調べることが出来た。

今後は，更に，資料を増やし，チェーホフの文体の特色を可能な限り客観的，かつ具体的に記述する必要性が残されている。研究は未だその緒についたばかりであると言えよう。

〔注〕

1) Чехов А. П. Каштанка: В кн.: А. П.Чехов, Избранные произведения в трех томах, т. 1, Изд-во Художественная литература, М. 1967 やその他の作品。引用文中のイタリック体は全て筆者に依る。
2) Виноградова В. Н. Об эволюции стиля А. П. Чехова (осовенности правки), В кн.: Стилистика художественной литературы, АН СССР, Изд-во Наука, М. 1982
3) Виноградова В. Н. См. указ. раб. стр. 86–98
4) Лазарев-Грузинский А. С. А. П. Чехов—В кн.: Чехов в воспоминаниях современников, М., 1952, стр. 96
5) Письмо А. С. Суворину, 10 апр. 1890 г.
6) Письмо А. М. Горькому, 3 дек. 1898 г.
7) А. М. Горькому, 3 янв. 1899 г.
8) А. М. Горькому, 3 сент. 1899 г.
9) А. М. Горькому, 3 янв. 1899 г.
10) Шаумян Л. С. и др. Словарь иностранных слов, 7-е изд., Изд-во Русский язык, М. 1980
11) Е. Т. Гославскому, 23 мар. 1892 г.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

12) А. П. Чехову, 8 мая 1889 г.

13) А. С. Лазареву-Грузинскому 13 мар. 1890 г.

14) семантическая синонимия の概念に就いては，山田勇『ロシア語に於ける類義に就いて。』香川大学教育学部研究報告 I, No. 31，1971を参照のこと。

15) 山田 勇 『ロシア語に於ける意味論上の主辞に就いて』香川大学研究報告 I, No. 57，1983を参照のこと。

16) Кокорина С. И. О семантическом субьекте и особенностях его выражения в русском языке, М., Изд-во МГУ, 1979, стр. 12

17) Розентадь Д. Э., Теленкова М. А. Словарь справочник лингвистических терминов. М., Изд-во Просвещение, 1976

18) Barnetová V.и др. Русская Грамматика, т. 2, Akademia Praha, 1979, стр. 683

19) Шведова Н. Ю. и др. Русская грамматика, т. 2, синтаксис, Изд-во Наука, М., 1980, стр. 97

20) Адамец П. Очерк функпионально-трансформационного синтаксиса современного русского языка, Frankfurt Am Main, 1977, стр. 147–148

21) Адамец П. См. указ. раб. стр. 113.

22) Кокорина С. И. См. указ. раб. стр. 25–26.

23) 文芸作品にみられる受動表現に就いてはエル．イー．イリョーミナに詳細な研究がある。

Еремина Л. И. Слово и контекст (стилистическое использование грамматической категории безличности в системе художественного текста)—В кн.: Стилистика художественной литературы АН СССР, Изд-во Наука, М., 1982

24) ペー．アダメッツは Максима охватил ужас. というタイプの文を考察して，これらの文は事実上状態受動を表わしているのだから，CVS という語順こそが中立的であると見做している。

Адамец П. Порядок слов в современном русском языке, Прага, 1966, стр. 65

25) Кокорина С. И. См. указ. раб.

Ковтунова И. И. Порядок слов и лексико-семантическая структура предложения—В кн.: Грамматическое описание славянских языков.

Литература

1. Алисова Т. Б. Именные члены простого предложения и их семантические Функции. «Филологические науки» 1970, № 2
2. Апресян Ю. Д. Экспериментальное исследование семантики русского глагола, М., 1967
3. Арутюнова Н. Д. Предложение и его смысл. М., 1976
4. Бертагаев Т. А. Субьект и подлежащее, «Вопросы языкознания», 1958, № 5

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

6. Виноградов В. В. Русский язык, М., 1972
7. Грамматика современного русского литературного языка, М., 1970
8. Кацнельсон С. Д. Типология языка и речевое мышление, Л., 1972
9. Общее языкознание, Внутренняя структура языка, М., 1972
10. Пешковский А. М. Русский синтаксис в научном освещении, М., 1956
11. Грамматика русского языка, т. 2, ч. 2., М., 1960
12. Кокорина С. И. О реализации структурной схемы предложения. «Вопросы языкознания», 1975, № 3
13. Ружичка Р. О трансформационном описании так называемых безличных предложений в современном русском литературном языке, «Вопросы языкознания», 1963, № 3
14. Виноградов В. В. Основные типы лексических значений слова, «Вопросы языкознания», 1953, № 5
15. Шахматов А. А. Синтаксис русского языка, М. — Л., 1941

(注に記した文献は除く)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

РЕЗЮМЕ

К стилю А. П. Чехова

—Вопрос о двусоставных предложений—

Назначение этой статьи состоит в том, чтобы анализировать стилистическую структуру художественных текстов на материале произведений А. П. Чехова. При анализе конкретного материала мы должны исходить прежде всего из того, «что́ же выбрасывалось Чеховым как лишнее и ненужное», когда он вновь переделал свои ранние произведения для подготовки десятитомного собрания сочетаний, вышедшего в 1899–1901 гг.

Работа Чехова над текстом не сводилась, естественно, к лексической точки зрения. Он тоже подверг значительной правке и синтаксическое строение предложений. Достигается это, во-первых, заменой одного предложения другим, с той же лексико-семантической базой, но с более или менее изменной коммуникативной или модальной функцией.

Обнаруживалось и стремление к точной, простой передаче грамматического залога, который функциально задается тем или иним актуальним членением и информациями об эмоциональном или модальном отношении человека к другой субстанции, которые характеризует словосочетание абстрактного существительного в номинативе и глагольного предиката. Исследование актуального аспекта науки о языке художественной литературы, с помощью которого можно было бы объективно и конкретно описывать внутренные качества индивидуального стиля, является, по-видимому, одной из главных задач современной лингвистики.

Проведенная работа рассматривается автром как ш а г на пути разработки изучения стиля А. П. Чехова.